

◆第27回みつなかオペラ「トスカ」公演評◆

関西音楽新聞 2018年11月号

妖艶な色気のある歌声 指揮者の手腕が光る響き

みつなかオペラ

プッチーニ「トスカ」

オペラ評

今年は《トスカ》の当たり年だろうか。大は新国立劇場引越し公演（びわ湖ホール）から、小は加藤英雄企画（豊中アクアホール）まで良質な公演が続いた。

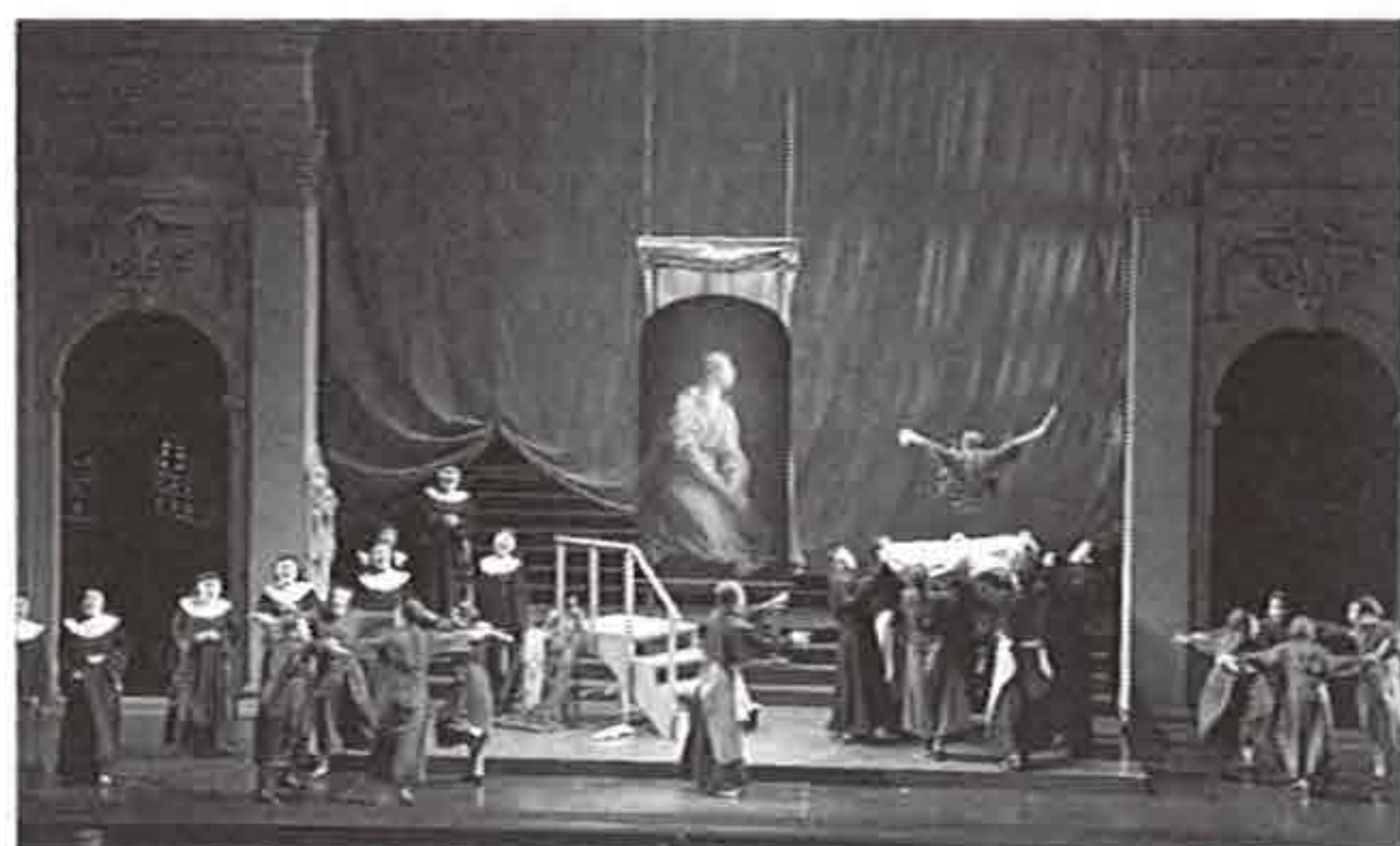
そのトリともいうべきみつなかオペラ。小さい劇場ながら毎年高水準のオペラ上演をしているが、今年の《トスカ》は出色の出来と言っているだろう。成功の立役者となっ



写真上下 撮影：仲野達也
提供：みつなかオペラ実行委員会

たのが題名役の並河寿美。卓越した豊かな声量と安定したイントネーション、妖艶な色気のある声で、気位高くやきもち焼きで可愛げのある歌姫を見事に歌いきった。とりわけ、第二幕の「歌に

生き、恋に生き」は絶唱といえる美しき。そこで対峙するスカルピアの片桐直樹も柔らかな声と味のある歌唱で、権柄づくで好色な警視總監というだけでなく、知的で狡猾で陰險な性格も炙り出した。幕尻の「これがトスカのキスよ」とナイフで刺す場面に向かって、二人の息詰まる歌唱が緊張感を高めて、聴きごたえがあった。カヴァラドッシの松本薫平は尻上がりによりくなり、第三幕で



は絶望の淵にある騎士の心境を沈痛に歌い上げた。服部英生もクセのある堂守をうまく演じた。

この劇場はピットが狭いためオケを縮小したりダクション版を使っている。ワグネルばりの管弦楽でスペクタクルを狙った本作での効果が危ぶまれたが、オケの響きの薄さを感じさせず、むしろ多彩な響きの変化を楽

しむことができた。特に第一幕終わりの「テ・デウム」は、錯綜したテクスチュアを効果的に纏め上げた指揮者牧村邦彦の手腕が光った。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、みつなかオペラ合唱団、夙川エンジェルコール（合唱指揮岩城拓也）も好演した。

井原広樹の演出は、狭い舞台を効果的に使い、オーソドックスながら、劇的緊張を徐々に高めてゆく手法は求心的で、マストロマッティの美しい装置とともに、大いに見応えがあった。総体的に、みつなかオペラの独自路線が成熟を迎えつつあることを実感させる素晴らしい公演であった。（10月7日、みつなかホール）

（横原千史）

的確な歌唱と演出 みつなかオペラの《トスカ》

座席数480のホールにすっかり馴染んだ地域オペラ。今回のプッチーニ《トスカ》ではドラマと音楽とが緊密に結びついて、凝縮した舞台が創りだされた。聖アンドレア教会（第1幕）など、コンパクトでリアルな外見を巧みに構成した舞台。牧村邦彦のタクトはダイナミックな響きで誘導、歌手陣は効率的な動きで歌った。第1幕での多少のぎこちなさも、第2幕以降は凄絶さを前面に出す演技で盛り上げられた。フランス革命の余波を受けた19世紀初頭のイタリアを取り巻く激動のドラマが、「恋と嫉妬の愛憎劇」で上塗りされた内容。一歩間違えると収拾のつかない混迷に陥りかねない。井原広樹の演出はそれを見事に整理。共和制を支持する芸術家のカヴァラドッシやアンジェロッティを若い情熱に殉ずる青年として純化する一方、王制を死守するスカルピアをその対極の、「悪魔の魅力」すら感じさせる存在として強調。その性格を片桐は的確に演じた。この関連の中で、トスカは「聖なる愚かさ」を備えた女性として浮き彫りされた。〈歌に生き、恋に生き〉のアリアも劇の流れから浮き上がらずに、効果的なインパクトを放射することができた。特に、〈歌に生き〜〉が歌われる間、スカルピアは静止状態で座り続けたが、それは次に来る激変のドラマを予感させる不気味な静止だった。全体に的確な歌唱と演出で、思索を誘う舞台に昇華していた。好演である（10月7日 川西市みつなかホール、並河寿美（トスカ）、松本薫平（カヴァラドッシ）、片桐直樹（スカルピア）、山本忠寿（アンジェロッティ）、服部英生（堂守・看守）、チョン・キヒョン（スボレッタ）、畑奨（シャルローネ）、蓬莱翔（羊飼）、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、夙川エンジェルコール）。（嶋田邦雄）